

モンキーズ

スーザン・マイノット

森田義信 訳



新潮社

モンキーズ

江苏工业学院图书馆

森田義信 蔵

書章



MONKE

© 1986 by

Japanese ed. first published in 1989 by Shinchosha Company
Japanese translation rights arranged with Georges Borchardt, Inc.
through Japan UNI Agency, Inc.

モンキーズ

スーザン・マイノット

もりた よしのぶ
森田義信訳

発行 1989.9.20 2 刷 1989.10.25

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社 郵便番号162/東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808

電話：業務部 03 (266) 5111

編集部 03 (266) 5411

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Yoshinobu Morita 1989. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り

下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-521801-8 C0097

価格はカバーに表示してあります。

モンキーズ* 目次

一九六六年 二月 かくれんぼ 7

一九六七年 十一月 感謝祭の日 31

一九六九年 三月 おこづかい 51

一九七〇年 七月 ワイルドフラワーズ 71

一九七四年 四月 パーティの悲しみ 87

一九七七年 八月

ナビゲーター

105

一九七八年 六月

事故

127

一九七八年 十二月

結婚っていうこと

147

一九七九年 五月

船の通る道

163

訳者あとがき

185

家族

オーガスタス・ペイン・ヴィンセント（ガス） 父親

ロージー・ヴィンセント、旧名ローズ・マリィ・オデア 母親

子供たち

ケイトリン・マリィ・ヴィンセント 長女

ソフィー・オデア・ヴィンセント 次女

ディライラ・ロスロップ・ヴィンセント 三女

オーガスタス・ペイン・ヴィンセント・ジュニア（ガス） 長男

ドナルド・シャーマン・ヴィンセント（シャーマン） 次男

チェイス・エンディコット・ヴィンセント（チッキー） 三男

ミランダ・ローズ・ヴィンセント（ミニィ） 末子

モンキーズ

家々はすべて海の中へと消えた

— T・S・エリオット

I

かく
れん
ぼ

わたしの家族に
わたしの母の記憶と
ベン・ソネンバーグに

お父さんは一緒に教会へは行かない。でもわたしたちはみんな、おしゃべりをしながら、もう階段の下に集まっている。お出かけの準備だ。しゃがんで、チッキーのスノースーツをぎゅうっと引っ張り、ボタンをとめてあげるママ。靴が半分脱げてかかどが見え、ストッキングが足首のところではわになっている。髪の毛の上に乗った黒いレースのベールが、まるで魔法みたいに見える。シャーマンがコートをはためかせながら通り過ぎようとすると、ママはフードをつかんでぐいと引きもどし、ジッパーを上げて彼のあごのあたりを指でつまむ。ガスは下唇を突き出してつつ立ったまま待っている。誰かにちゃんとひっぱたかれたみたいな顔だ。もう七歳だというのに、まだママに服を着せてほしいらしい。

遅れていたデリラが、結構ゆったりとした足取りで階段を降りてくる。かろうじておしりにひっかかっているスカート。すっかり寝ぐせのついた髪。まるで浮浪児みたいだ。ピーコートを着て素足にローファアの靴をはき、すっかり準備の整ったケイトリンが「もう出かける時間よ」という。手すりの最後のところを曲がりきったデリラは、素足のケイトリンを見て「そ

れじゃ凍えちゃうわよ」とやりかえす。起きたばかりだから、みんな機嫌が悪い。

パパはもう外にいて、フレンチドアの向こう側でわたしたちを待っている。思い出したようにほったたをふくらませて吐き出す息が真つ白だ。外は寒いのだろう。黒いパーカのポケットに手を突っこんだまま、足をぎゅっとくっつけてポーチの上に立ち、かちかちに固まった芝生の雪を眺めている。パパは寒がりではないから、帽子はかぶらない。暖かいところが好きなのはママのほうだ。スキーに行っても、つま先がしびれてくるころになると、ママは決まってわたしたちを中に入れてくれる。そして、熱いココアやフライドポテトの箱や他の母親たちに囲まれて座っているわたしたちの足を、血のめぐりがよくなるようにきすってくれる。

もう車も暖まっている。排気ガスがまっすぐ立ちのぼり、白くうねりながら消えていく。

「さあ、お猿さんたち」わたしたちを一列に並ばせ、ドアの外へ押しやりながらママがいう。よちよちと赤いブーツで階段を降りていくチャッキーを、ママはさつと片手で抱えあげる。わたしたちは、氷が張ってしわが寄ったようになっていて、門までの道を、まぶしさに目をばちばちさせながら、足を滑らせて歩いていく。まだ頭は半分眠ったままだ。

みんなで出かけるときはステーションワゴンだ。ガスとシャーマンが、ゆったりとした後ろのシートに大急ぎで乗りこむ。前から頭が見えるのはケイトリンだけ（ケイトリンが一番年上で十一歳。そしてわたし。それからディライラがいて、弟たちがいる）。ママは手袋をした親指のあたりをハンドルにこすりつけている。そうすると、関節のところが曲がりやすくなるし、手袋が光ってくるからだ。パパは溝でも調べているようなそぶり、わたしたちが出かけるのを待っている。車が猛スピードで坂を下りると、やっとパパは家へと戻っていく。大きくて、がらんとし

て、すっかり静かになった家へ。

教会でもコートは着たままだ。オショーンネッセイ家の子たちを除いて、子供はほとんどひとつの席に集まっている。カトリック教徒ではないパパが教会に来るのは、クリスマスとイースターのときだけ。それにもともと、教会では母親たちしか見かけないことが多い。うちにいるときのパパは、森で木を切ってきたり、サンザシを裂いたり、落ち葉を掃きあつめて焚火をするか、家の裏にあるライラックのそばに立って、ただじっと庭を眺めながら、次は何をしようかと考えていたりする。普通わたしたちは教会の前のほうで、背筋を伸ばして座っている。後ろのほうでは、ひざまずいている人が多い。いつかなんて、ガスがダイアモンドの形をしたヒーターの穴に指を突っこんでしまい、ママが思い切り引つ張らないと抜けなくなることがあった。男の人が献金を集めにやってくると、わたしたちはそれぞれ五セントや十セントを入れる。先に献金袋のついた長い棒が、熊手のように動いていく。五ドル札しか持っていないとき、ママは、しっかりおつりに一ドル札を二枚ほど引きぬく。

教会はとても大きい。しんと静まりかえった中、どこかの赤ん坊が「パパー」と叫ぶ。くすくす笑っているわたしたちを、ママが「シーッ」とたしなめる。でも、その顔も笑っている。赤ん坊って、いつも一番静かなときに大声を出すものだ。弟たちはまだ小さくて、聖体拝領には行けない。聖体は、噛んではいけないことになっている。司祭さんの首のあたりの皮がむけかかっていて、わたしはなるべく見ないようにする。「あの、冷たい感じだわ」外に出ながら、聖水にひたした指で自分の額をさわって、そうママがいう。

家への帰り道、ケージさんの店に寄って、新聞と、ロリポップが八本入った袋を買う。わたし

たちに一本ずつ。そしてママとパパ。パパはロリポップなど食べないし、わたしもルートビアのほうがいい。シャーマンが、誰かが見ていないかときよろきよろしながら、音を立てて包み紙をあける。ガスが「シャーマン、朝ごはんのあとまで待たなきゃだめなんだぞ」という。シャーマンはものすごい目でガスをにらみかえすと、口の中にロリポップを放りこむ。前にいるママが、ウィンカーを点滅させながら、「出しなさい」という。まるで頭の後ろに目があるみたいだ。

週末にどんなことをするかは、時期によって違う。秋にはキャッスル・ヒル庭園へ行つて、イブスウィッチという町の果樹園のそばでサイダーを飲んだり、りんごや赤いリコリスを食べたりすることもある。夏のあいだはお屋敷の中も見られるキャッスル・ヒルだけれど、庭が落ち葉に覆われるころになると訪ねる人もいなくなる。ママはテラスの窓のところへ行き、両手で目のまわりに覆いを作つて中をのぞきこむ。でも、見えるのはカーテンだけだ。わたしたちは、丘をごろごろ転がったり、ミイラのまねをして腕を硬直させたり、ひんやりとした大理石の像によじのぼったり、噴水のへりで落ちないようにバランスを取ったりして遊ぶ。噴水は空っぽで、内側に赤い落ち葉がへばりついているだけなのに、ママは「気をつけて」という。わたしたちに気づくと、パパが「降りなさい」とどなる。

ママの話だと、どんな庭にも必ず幽霊がいるということだ。あるレディが家を抜けだし、庭の葡萄棚の陰で恋人と会う。でなければ、レディは庭のどこかに隠れていて、恋人のほうが彼女を見つけたす手はずになつていられるのかもしれない。だがある夜のこと。家を抜け出したのはいいけれど、待っても待っても恋人はやつてこない。ついにレディは耐えられなくなり、頭がおかしくなつて崖から飛びおりて死んでしまう。レディは幽霊になつて庭に戻り、今でもそこで待ちつづ

けている。わたしたちは、ぎゅうぎゅうづめになりながら、黄色い草の実や湿った木の皮の匂いのする庭のくぼみにもぐりこむ。ディライラがみんなを怖がらせようとして、「今の、何？」といて飛びあがる。パパは、木を揺すって腐っているかどうか調べている。わたしたちは先に走っていき、うずたかく積もった落ち葉の中に隠れる。小枝が口の中や鼻の中に入るけれど、じつと隠れたまま、ママとパパがばちばちと葉っぱを踏みしめる音に耳を澄ます。すぐそこまで来たのがわかると、わたしたちはふたりをびっくりさせようとして、一度に跳び起きる。灰の水曜日アッシュ・ウェンズデーのグレーの灰のように、ほこりや小さな砂粒を顔じゅうくつつけたままみんなが飛びだすと、枯れ葉が舞い落ちる。だが、ふたりは何事もなかったかのように歩きつづける。ママがパパの襟についた松葉を取ろうと手を伸ばすと、パパは勘違いして頭をびくっと引っこめる。たぶん蠅だと思ったのだろう。わたしたちはみじめな姿のまま、ふたりのうしろについて車へ戻る。

朝ごはんを食べるのは家に帰ってきてからだ。教会へ行く前にもものを食べてはいけないことになっている。パパが、新聞かベーコンを一切れ取りに、キッチンへ入ってくる。パパについていえることは、食べ物に興味が変わっているということ。豚肉の缶詰スバムが大好きだし、誰も匂いに耐えられないようなチーズも好物だ。パパはほとんど座ってものを食べない。座しているときでも両足を床につけて椅子の片側にそろえ、いつでも芝生に白い肥料をまきに外へ行けるようにしている。後で見ると、芝に霜が降りたみたいだ。

今日の日曜日は、みんなでアイスハウス池へスケートをしに行く。運転するのはパパ。「少し

静かにしなさい」と後ろのシートに向かっていう。まわりに白い毛皮のついたフードをかぶったママが、パパのほうへ向きなおる。ママは「おじさん」を縮めて、パパのことを「おんじ」と呼ぶ。パパもわたしたちもママのことはママと呼んでいるのに、ママはパパのことを「おんじ」と呼ぶなんて、きつとふざけているのだろう。わたしたちは大騒ぎだ。

「やめてくれる？」とケイトリンがガスをひじでつつく。

「何を？ 僕、何もしてないよ」

「窮屈なのよね」

一番後ろにいろのはシャーマンだ。「どうしてチャッキーはいつも前なの？」

「赤ちゃんだからよ」ディライラはいつも何かを説明している。

「ぼくあかちゃんない」チャッキーが振り返りもせずという。

ケイトリンがわたしのほうを見て、しかめっつらをする。「誰がわたしのスカーフをしていいっていったわけ？」

わたしは、だめだとわかっていながら前のシートに向かってきく。「フェアリー・ガーデンに行ってもいい？」

「どうしてラミーを連れてこなかったの？」

「パパがそう決めたからよ」とディライラが答える。

シャーマンは、パパが滑れるようになったのはいつごろだったのか、知りたがっている。

「おまえくらいときさ」とパパがいう。その声はとても低い。

「本当？」わたしは、シャーマンくらいの年のパパを想像してみる。